

佐竹義宣の鷹狩と本多正純事件

及川 亘

一 はじめに

幕藩体制においては、鷹狩が単なる趣味的な嗜好を超えて、鷹そのものや鷹狩による獲物の献上と下賜を通じて、將軍と大名の間の贈答儀礼として制度化されていたことは改めて言うまでもない。

関ヶ原戦後に常陸から秋田・仙北に転封された佐竹義宣にとっても、鷹の贈答儀礼を通じて將軍家と良好な関係を保つことは重要な課題の一つであった。家康同様に鷹狩を好んだとされる秀忠との個人的な友好関係も鷹を通じて得られたという面がある。⁽¹⁾

一方で義宣の鷹への関心と専門化並みの知識は、単に贈答儀礼上の必要や、当時の大名一般の嗜みといった程度にとどまらないものであったとも考えられる。⁽²⁾『梅津政景日記』読本⁽³⁾（無明舎、一九九二年）は、義宣が在国時にいかに鷹狩に明け暮れたかを、「梅津政景日記」の記事をもとに、元和六～七年、寛永三～四年、寛永七～八年について具体的に紹介している。そこからは義宣の鷹狩に対する並々ならぬ情熱が見て取れるわけであるが、さらに義宣の鷹狩から、何かしら時期による特徴なり傾向が読み取れないだろうか。本稿では基礎作業の一環として、さらに「梅津政景日記」から佐竹義宣の帰国時の鷹狩（鷹野・渡野）に関する記事を網羅的に抜き出して検討してみたい。特に断らない限り、

典拠は『大日本古記録 梅津政景日記』による。

なお末尾に、義宣の鷹狩を、元和三年以降の帰国年次ごとに一覧表としてまとめた（表①）～（表⑨）。鷹狩の場所が分かれば地名を記し、久保田から日帰りの鷹狩であるが場所が分からない場合は●印を付した。なお参考のために鉄炮打ちとそれ以外の遊山についても項目を設けた。また鷹場として登場した地名を秋田地方と仙北地方に別けて白地図に落とした（図①）・（図②）。これらを参照しながら進めたい。

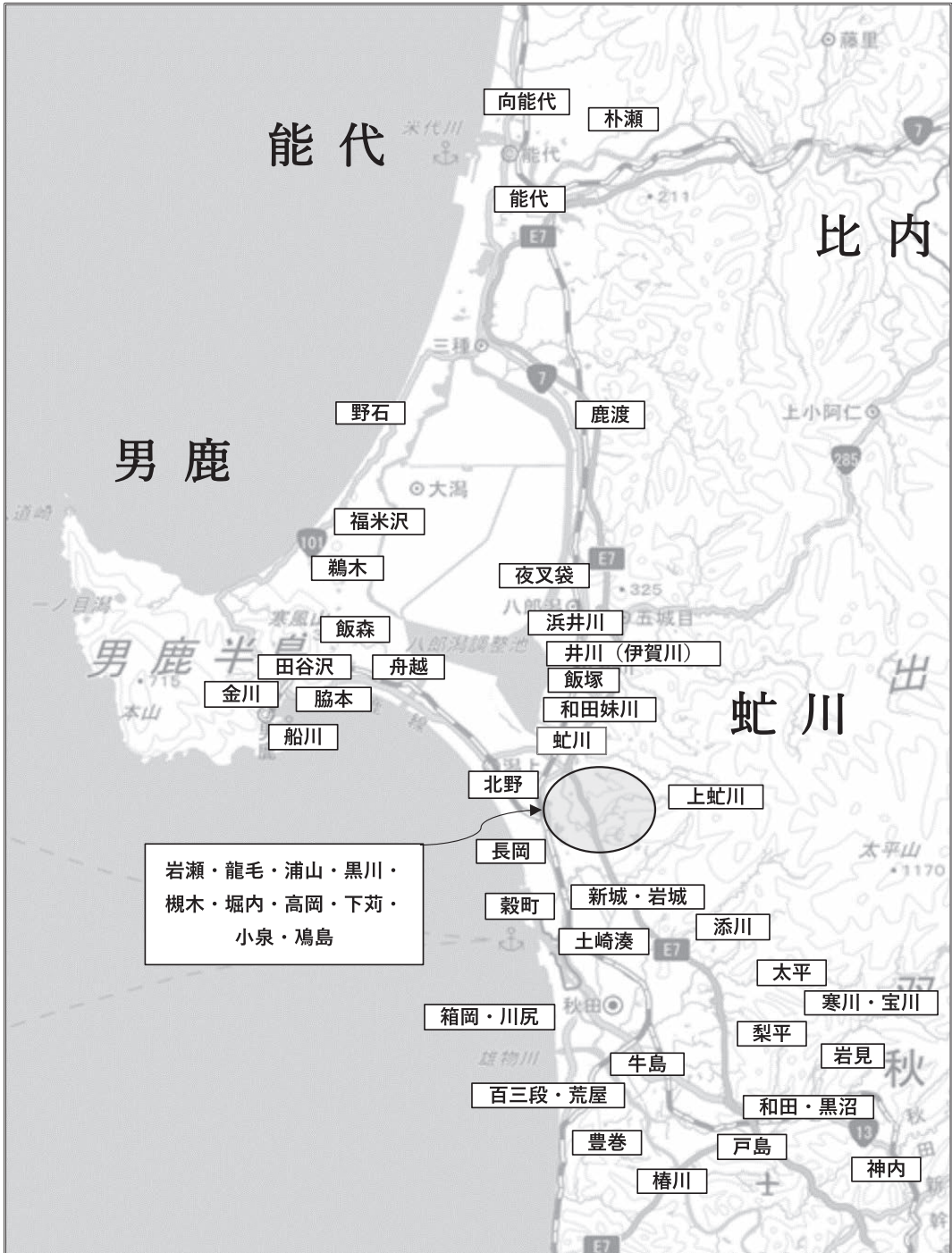
二 「梅津政景日記」にみる佐竹義宣の鷹狩

元和三年まで（表①）

「梅津政景日記」の始まる慶長十七年は、政景は義宣と行動を共にすることが少なく、義宣の動向はあまり分からない。慶長十八年は通常の日記は残されておらず、「院内銀山籠者成敗帳」が残されるのみで、やはり義宣の動向は分からない。

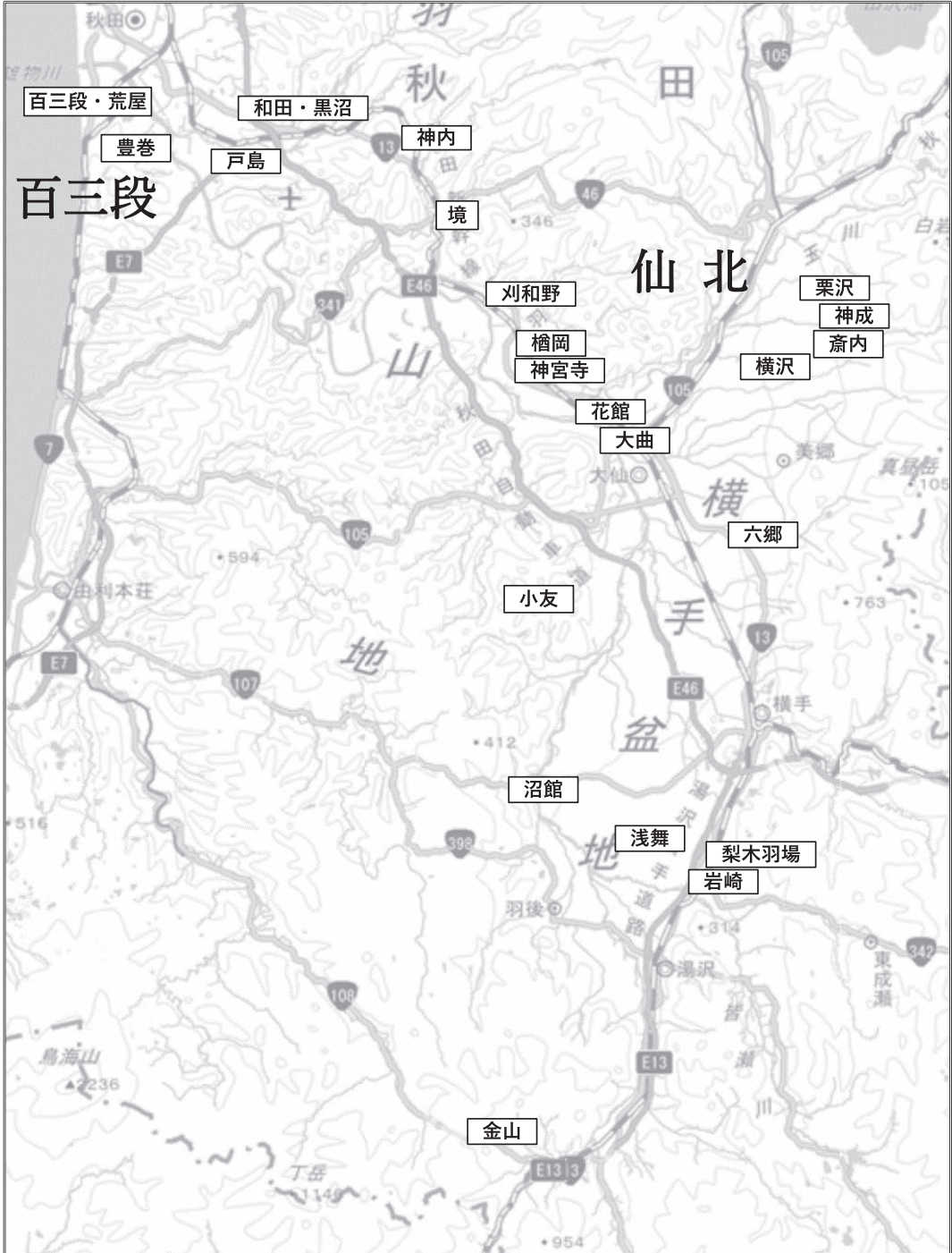
慶長十九年は、義宣は正月四日に恒例の鷹野に出たとされ、義宣が毎年正月四日に初野（一年最初の鷹狩）に出かけていたことが分かるが、それ以外は鷹狩の記事がない。これは政景が院内など領内の出張が多く、義宣の細かな動向を把握していない時期が多いこともあり、必ずしも義宣が鷹狩に出かけなかったことを示すものではないが、義宣の鷹狩に対

【図①】佐竹義宣の鷹場（秋田）



国土地理院白地図より作成

【図②】佐竹義宣の鷹場（仙北）



国土地理院白地図より作成

する政景の関心がいまだ薄いことにもよるのである。

慶長二十年（元和元年）は日記が残るのは八月以降で、鷹狩に関する記事も、十一月三日と二十六日の義宣の鷹狩に政景本人が扈従したかどうかといった内容で、義宣の鷹狩に対する政景の扱いはそれ以前と同様である。

元和二年は正月四日の初野は荒天のために翌日に延期された。その後七日には男鹿方面に出かけようとしたが、やはり荒天のために土崎湊に滞留し、そのまま天候はよくならず、十日に帰城した。十一日に男鹿へ向けて再度出発し、十五日には虻川まで戻り、十八日には虻川から久保田に戻った。二月六日に久保田近郊に鷹狩に出かけた後、同十一日から十四日まで再び男鹿に渡野に出た。その後、二月十八日に駿府にて重篤に陥った大御所家康の見舞いのために久保田を立出し、三月二日には駿府に到着した。家康の死後、將軍秀忠への弔問なども済ませ、五月九日には江戸を発った。二十日に横手に着くと、そこから先は鷹狩をしつつ、二日後の二十二日に久保田に着いた。その後は七月十日と八月四日に鷹狩の記事があるのみで、八月十日には早くも江戸出府のために久保田を発った。

江戸では義宣の鷹狩にとって大きな出来事があった。十月、義宣が白の大鷹を秀忠に献上すると、秀忠はその返礼として鳥屋の大鷹と若鷹を下賜したのみならず、義宣の参勤の途上に当たる栗橋（現久喜市）・古河（現古河市）・柳橋（同上）・山川（現結城市）・結城（同上）・下妻（現下妻市）・下館（同上）辺りの鷹場を下賜したのである。この時期の鷹場の下賜は、御三家を除けば、家ではなく一代限り個別に行われたとされるので、鷹場の拝領によって、義宣は鷹を通じて將軍秀忠と自らの特別な関係を自覚し、これまで以上に忠勤に励もうとしたことであろう。

元和三年は越年して正月十一日に帰国の暇が出、同十五日に江戸を発

足した。途中、秀忠より拝領したばかりの鷹場で鷹狩をしつつ、二月二日に久保田に着いた。二月十五日より十九日まで男鹿・虻川に、三月には、政景の出張により出発した日は分らないが、六日まで虻川に渡野に出かけた。四月十四日には秀忠の上洛に供奉するために、江戸に向けて立出し、この年はそのまま国許には戻らない。

元和三年以前は梅津政景が佐竹義宣と行動を共にすることが少なく、そもそも義宣の鷹狩に関する記事が少ないが、政景が分かる限り漏らさず義宣の鷹狩の記事を日記に載せるようになるのも、元和二年の鷹場の拝領と無関係ではないだろう。

元和四～五年の帰国（表②）

元和四年閏三月十九日に義宣は帰国の暇を賜り、同二十三日に江戸発足、四月上旬に久保田に着いた。政景は在国で四月九日までは院内出張していたので、「政景日記」に義宣の帰国途中についての記事はない。

帰国後の主な動向を見ると、五月十五日より十八日まで虻川、六月十一日より十三日まで岩見で渡野を行い、それ以降八月末までは鷹狩ではなく鉄炮打ちに出かけた。九月六日より十五日まで虻川に赴き、虻川での鷹狩のための休憩所の建設に立ち会った。十月・十一月は政景が比内・院内に出張のため、鷹狩関係の記事はない。十二月には土崎湊など久保田近郊に日帰りで数回の鷹狩に出かけた。年が明け元和五年の正月には、四日より十五日まで虻川・下莉に恒例の初野に出かけた。その後まとまったものとしては、正月二十五日より二十九日まで、また二月六日より十五日までもに虻川に鷹狩に出かけた。そして二月二十二日には將軍秀忠の上洛に供奉するために江戸に向けて久保田を出発し、途中、下野の白坂と萱橋の鷹場で鷹狩をしている。

元和四～五年の帰国では、途中十月と十一月の鷹狩記事を欠くものの、

十ヶ月間で少なくとも五十六日は鷹狩に出かけた。冬が鷹狩のシーズンであることを考えると、記事のない十月・十一月を合わせると七十日余りは鷹狩に出かけたことになるだろう。

元和六〇七年の帰国【表③】

元和六年は、義宣は四月に江戸を発足し、早くも同十三日の夜には久保田に到着している。帰国途中に下野の鷹場での鷹狩はせずに、帰国を急いだらしい。

この年は五月八日より七月十日まで政景は上方に出張し、この期間の義宣の鷹狩の記事を欠く。八月は五日より十日まで仙北に鷹狩に赴いたほかは、久保田近郊に鉄炮打ちに出ることが多かった。九月は単発で近郊に鷹狩や鉄炮打ちに出かけた。十月以降の主なもの挙げると、十月は七日より十四日まで虻川に、二十一日より二十七日まで仙北境に、十一月は七日より十七日まで虻川に、十二月は四日より十五日まで仙北に、その他久保田の近郊などに五日、閏十二月は二十一日より二十五日まで虻川に、その他久保田近郊に九日、それぞれ鷹狩に出かけた。年が明けて元和七年正月には、四日より十日まで初野に虻川から男鹿方面に足を延ばし、二十日より二月三日まで再び虻川に、その後五回久保田近郊に出かけ、二月十二日には江戸参府のために久保田を発足した。

元和六〇七年の帰国では、政景が上方出張で鷹狩記事を欠く二ヶ月間を除いても、九十日に及び鷹狩に出かけている。政景が不在にした五月から七月は鷹狩シーズンからは外れるが、在国の約十一ヶ月の間に百日近く鷹狩に出かけたことになる。

元和七年の湯治賜暇【表④】

元和七年は、義宣は二月に江戸に参府するが、十月十日、年寄の土井

利勝と旗本の島田利正の斡旋により、寸白治療のための暇を与えられた。義宣の「御りち儀の様子」の褒美として暇が与えられたと政景は記している。下野の所領の萱橋に塩原の湯を運ばせて湯治することとし、十月十四日に江戸滞在中の公家日野輝資や上杉景勝・伊達政宗とともに秀忠の数寄に招かれて暇乞いをして、翌日萱橋に向けて江戸を發った。

ところが義宣の寸白治療は半分は名目で、下野領での鷹狩が本当の目的であった。早速現地でも鷹狩をして、同二十日には所獲の雁を旗本の島田重次に贈ったが、思いがけないことに重次は「兼而之御りち儀無二罷成候」と大変立腹した。これには義宣も慌て、重次の子・利正に鷹狩の賜暇の希望を伝え、秀忠への取り成しを依頼し、同二十八日には秀忠に若大鷹を八つ献上して、ようやく無事に鷹狩のための暇を与えられた。そのまま萱橋に逗留して鷹狩をするつもりであったが、医師の今大路親清の助言により、一旦江戸に戻り、十一月六日に登城して秀忠に賜暇の謝礼を行った。同二十日に改めて登城して秀忠に暇乞いをし、秀忠から鳥屋の大鷹（三、四歳の鷹）を二つ拝領して再び江戸を發った。

その後、十二月四日に江戸に帰るまで大いに鷹狩を楽しみ、江戸滞在中の日野輝資や、幕府年寄の土井利勝・酒井忠世、島田重次・利正父子などの知音に所獲の雁を贈った。同五日には江戸城に登城し秀忠に雁を献上した。実は秀忠も十一月二十二日より十二月三日までは越谷に鷹狩に出かけており、その出立の前日には義宣から若大鷹二つを献上していた。義宣が雁を進上したのに対して、秀忠は所獲の鶴を義宣に下賜し、大物を与えた秀忠の得意顔が目には浮かぶようである。

元和八〇九年の帰国【表⑤】

元和八年の帰国は遅れた。すでに三月頃には奥州大名に対する暇が出るのではないかという風聞があったが、四月に秀忠の日光社参があり、

越前北莊の松平忠直の江戸不参や山形の最上家の内紛が落着かない情勢のもと、奥州大名の下国も延期された。八月に最上義俊が改易され、城地請取の幕府上使として本多正純が派遣されると、義宣は梅津政景を現地に送って正純の指示を仰がせたが、その正純が派遣先からそのまま由利五万五千石に転封されることとなった⁽⁴⁾。それに合わせて義宣や伊達政宗の帰国の暇も出された⁽⁵⁾が、これには事実上の配流となった正純への警戒の意味があったという⁽⁶⁾。

義宣は十月八日に江戸を発ち、下野の鷹場に数日滞在して同二十五日に久保田に着いた。年内は、十月二十九日より十一月四日までの六日間と十一月二十日から十二月五日までの十五日間虻川で鷹狩を行ったほか、大平・添川など久保田近郊の鷹場に十日ほど出かけた。お気に入り虻川を中心として、約二ヶ月間のうち半分ほどは鷹狩に出かけたことになる。

元和九年は「梅津政景日記」が欠けており、義宣の鷹狩の様子は窺えない。

寛永元々二年の帰国（表⑥）

寛永元年は四月十五日に帰国の暇が出、十八日に江戸を発足した。この時は旅路を急いだと見えて、下野領でゆっくりと鷹狩などはせず、二十五日には領内に入った。領内に入ってから、道すがら鷹狩を行いがら三十日に久保田に着いた。

実は四月十八日に義宣が江戸を発った時、政景は取次の旗本島田利正の許に遣わされ、そこで利正の書状と口上を帯びて主人の後を追った。この時の用件が何であったかは、領内に入ってから日記の記事から判明する。四月二十八日、政景は六郷辺りで義宣と別れて、元和八年に由利に転封され、さらに翌年事実上の改易処分となって仙北郡大沢郷に移

されていた本多正純・正勝父子を迎えに行った。彼らは横手において佐竹家の預かりとなることになっていたのである。翌日、大沢に赴いた政景は正純の家臣を通じて幕府の命令を伝え、正純本人とも面会した。島田利正から預かった書状と口上はこのためのものであったのである。五月二日に政景は正純・正勝父子を横手に送り届け、横手城代の須田盛秀に引き合わせた。そして、三日には先に久保田に入っていた義宣に、正純・正勝親子を無事に横手に送り届けたことを報告した。今回の義宣の帰国は、この正純の処分と関連してのものであった。そのため義宣は帰国の路次を急いだものと思われる。

国許に戻った義宣は、五月四日に雄物川下流地域の荒屋と豊巻に鷹狩に出かけた。荒屋は前年の領地交換により佐竹領となっていた百三段^{ももさだ}の一部で、義宣はこの時初めて百三段領に入った。また十日より十六日まで能代・男鹿方面に渡野に出かけた。六月は鷹狩の記事はなく、七月は久保田近郊の北野に二回鷹狩に出かけたほか、五日より十三日は仙北方面に渡野に赴いた。この間、八日には義宣は横手で正純と面会している。今回の渡野が正純との面会を一つの目的としていたことは間違いないところであろう。

その後九月中旬までは政景が江戸に出張しており、義宣の動向は日記に記されない。九月は二十五日より二十九日まで虻川に渡野に出かけ、この時獲れた白鳥を秀忠に献上した。

十月は本格的な鷹狩シーズンの始まりで、十一日より二十六日まで長期に亘って虻川を拠点として鷹狩を行ったほか、数日は久保田近郊に出かけた。十一月は七日より十八日まで仙北に渡野に出たほか、二十二日より翌月七日にかけて虻川を拠点に男鹿方面にも足を伸ばした。十二月は二十日より二十二日の三日間仙北の比較的近い地域に出かけたほか、太平山など久保田の東の地域に出かけ、これには政景も扈從した。

年が明けて寛永二年の正月は、四日より九日まで初野に男鹿方面まで赴いたほかは、数日間久保田近郊に出かけ、二十一日に江戸参府のため久保田を発った。この時の帰国では約九ヶ月の在国の間に、一〇二日も鷹狩に出かけた勘定になる。

寛永三〜四年の帰国（表⑦）

寛永三年は十月二十七日に帰国の暇が出、翌日江戸城に登城して拝謝、三十日に江戸を発った。途中例によって秀忠より拝領の鷹場で鷹狩をしながらの旅であり、下野領の萱橋を出たのは十一月十三日になってからであった。政景は後れて十二月四日に江戸を出発し、十八日に久保田に着いたが、その時すでに義宣は虻川に鷹狩に出かけて留守であった。義宣は二十三日に虻川から久保田に帰城した。年内はあと三回久保田近郊に出かけた。

年が明けて寛永四年の正月は、例年通り四日に初野として虻川を中心として男鹿まで出かけ、ようやく十二日に戻った。正月はこのあと五回は太平など久保田から比較的近い鷹場に赴き、二十七日から二月三日にかけて虻川に出かけたが、その後も単発のものを含みながら、二月七日より十七日まで虻川・男鹿から能代にまで足を伸ばし、二月二日から三月五日までは仙北、三月八日より四月一日までは虻川から能代、四月七日より十六日まで仙北、四月二十八日より五月十二日まで再度仙北と渡野に明け暮れた。

夏季は一般に鷹狩はシーズンオフとなるが、六月二十五日より七月十日にも仙北に渡野に出ている。八月・九月は政景の出張により、義宣の動向が分からない時期があるが、九月十二日に政景が久保田に戻ると、義宣は男鹿・虻川に渡野に出ており、十四日に久保田に戻った。参勤の時期が近づき、冬の鷹狩シーズンも目前であるので、最後にお気に入り

の虻川で鷹狩を楽しんだものと思われる。この時は運良く白鳥が獲れ、江戸に進上することにした。十月に数日間虻川で湯治をした後、二十二日に江戸参府のために久保田を発った。

寛永五〜六年の帰国（表⑧）

寛永五年は十月二十五日に帰国の暇が出、二十七日に江戸を発足した。やはり拝領の鷹場で鷹狩をしながら、十一月八日に下野領の萱橋に着いた。九日に萱橋から秀忠・家光に鷹を献上したが、十三日には秀忠より返礼として鷹狩所獲の鶴を拝領した。途中寸白を病むこともあり、領内の道中では鷹狩を控えたのか、関連する記事がなく、十一月二十二日には久保田に着いた。

十二月は、太平・添川など近郊での鷹狩を挟みながら、まとまった渡野としては七日より十八日まで虻川から男鹿方面に出かけた。

年が明けて寛永六年正月は、四日から恒例の初野に虻川・男鹿に出かけ、その他は太平・豊島など久保田近郊で鷹狩を行い、正月二十九日より二月十五日まで再度虻川・男鹿方面に赴いた。二月は二十一日より二十九日までもう一度虻川に渡野し、閏二月にも三日より十二日まで虻川から能代へと足を伸ばした。

それから間を置かず閏二月十四日に仙北方面に向けて発足するが、出先で十八日に江戸の義隆（義宣弟岩城吉隆、義宣嗣子）より参勤すべしとの報を受け取り、直ちに政景を久保田に送って供の準備をさせるともに、本人は天童まで進出して待機するが、二十二日にはいったん仙北に戻った。その後二十七日に再び江戸より参勤すべきとの飛脚があり、二十八日に八丁目（現福島県郡山市）まで行ったところで、結局引き返すこととなった。途中寸白を再発し、三月十四日によりやく久保田に戻ることができた。

その後、三月三十日より四月十三日までには能代から比内方面まで足を伸ばして渡野した。そこから戻ると、十六日より二十七日まで、五月十一日より十八日まで、六月二十五日より七月九日までいずれも仙北に渡野に出かけた。

八月・九月は久保田近郊での鷹狩が多かったが、九月二十一日より十月二日まで、鷹狩シーズンの幕開けとして虻川・男鹿に赴いた。

十月は十日より十六日まで虻川に出かけたほかは、太平や添川といった久保田近郊で鷹狩を行い、十一月一日に参勤のために江戸へ向けて出発した。このちょうど一年の間に、参勤の情報錯綜のために仙北で滞留した期間もあるものの、驚くことに一七二日も渡野に出かけている。

寛永七々八年の帰国〔表⑨〕

寛永七年は十一月十三日に帰国賜暇の拝謝をして、翌十四日に江戸を發つた。二十八日に萱橋に着くまでゆるゆると鷹狩をしながら移動し、二十九日に萱橋を出立した。ここで政景は腫れ物の療養のためにいったん江戸に戻ることを許され、義宣と別れたため、義宣の萱橋から先の道中については分からない。政景は十二月六日に江戸を發ち、十二月二十日に久保田に着いた。年内は義宣もまとまった日数の渡野には出かけなかったものと思われる。

年が明けて寛永八年正月は、四日より十八日まで虻川・男鹿方面に恒例の初野に出かける。近郊での鷹狩を挟みながら、正月二十六日より三十日まで、二月二日より九日まで虻川で鷹狩を行った。それ以降はまた近郊での鷹狩を挟みながら、二月十二日より三月六日まで二十数日に亘って仙北に、三月十日より二十二日まで虻川より能代・比内方面に、四月二十日より五月一日まで虻川・能代に、それぞれ渡野に赴いた。

五月より七月は鷹狩のオフシーズンで、久保田近郊での鉄炮うちが主

であったが、五月三日より十三日まで仙北に、七月に入ると十一日・十二日に男鹿に、七月二十日より二十六日まで仙北に鷹狩に出かけている。八月は大御所秀忠の病氣見舞いのために江戸に参府することになった。六日に久保田を出発し、九日には天童に至ったが、伊達政宗や上杉定勝が参府を取りやめたという情報を得て、一旦久保田に戻った。しかし十三日になり、政宗から秀忠が本復しないので江戸に参府するという報があり、義宣も久保田を出発した。二十二日に萱橋に着き、そこで幕府年寄衆の指示を仰いだところ、二十六日に年末には参勤することになるので早々に帰るようにとの指示を受け、そのまま帰国の途につき、九月九日に久保田に帰り着いた。この時は政景は同行しておらず、義宣の鷹狩についての記事はない。

久保田に帰城すると、九月は連日のように近郊の鷹場へと赴いた。十月は六日より十四日まで虻川・能代に、閏十月は八日より二十日まで虻川に渡野に出かけた。二十四日には参勤のために久保田を發ち、十一月十日に江戸に着いた。今回の帰国では丸一年、十三ヶ月の間に少くとも一四六日間も鷹狩に出かけたことになる。

江戸に参勤した義宣は、翌寛永九年正月に薨去した秀忠の一周忌の後に帰国する予定であったが、そのまま江戸で病床につき、回復することなく寛永十年の正月に江戸で卒去した。この時江戸に扈從しなかった政景は、二月に主君の靈柩を久保田に迎え、三月十日に跡を追うように病氣により亡くなった。

三 まとめ―佐竹義宣の鷹狩と本多正純事件

煩雑になったが、「梅津政景日記」により佐竹義宣の鷹狩をできる限り復元してみた。全体としてみると、久保田から二〇キロほど北上した虻川が、義宣の鷹狩の最も重要な拠点であり、最もお気に入りの鷹場で

あったことが分かる。元和四年には渡野のための休憩所も設けられ、正月に在国する時には恒例となっている初野も虻川から男鹿が舞台となった。日帰りの場合は太平など久保田の東に点在する鷹場を使うことも多かったが、数日を開ける渡野は虻川を拠点として行われることが断然多かった。一方で仙北方面は元和六年まで、北方の能代・比内は寛永元年まで記事に現れない。

義宣の鷹狩の最初の画期は、元和二年に將軍秀忠より鷹場が下賜されたことに求めることができる。それ以前は政景の居場所が主君の義宣と異なることが多く、義宣の動向が政景の日記からはつかみにくい。また一方で主人の鷹狩に対する政景の関心も相対的に薄いようで、義宣の鷹狩について漏らさず記録しておくというよりは、政景自身が鷹狩に扈従するかどうかといった記述にとどまっている。しかし、元和二年の鷹場拝領後は義宣の鷹狩に関する記事が飛躍的に増える。これは義宣本人の鷹狩の回数が増えたというだけでなく、政景自身が、ひいては佐竹家中全体として、幕府と佐竹家の関係における鷹の重要性を強く意識するようになり、義宣の鷹狩に対する政景の関心も強くなったことを示すのである。元和四年以降は、政景が義宣と行動を共にすることが以前より多くなり、また義宣の鷹狩を細大漏らさず記録しようとする姿勢が窺える。それにより義宣が帰国するたびに驚くほどの日数を鷹狩に費やしていることが具体的な数値として実感できるのである。

次に変化が見られるのは寛永元年である。この年は能代・比内方面や仙北方面にもまとまった期間渡野に出かけ、領内全体をカバーするようになっていた。このような変化は元和八・九年の帰国時に生じた可能性もあるが、「梅津政景日記」は元和九年を欠いており、明らかにすることができない。

最後の画期は寛永三年に求められる。それまでの四月頃帰国、翌年二

月頃参勤のパターンから、この時の帰国からは十月・十一月頃帰国、翌年十月頃参勤に変わった。当然それに合わせて、義宣の国許でのスケジュールにも変化が見られる。鷹狩に関しては、帰国後は先ず一番お気に入りの虻川・男鹿に渡野に出向き、年内は虻川のほかは太平など久保田から比較的近い鷹場に日帰りで行かけた。年明けも鷹狩シーズン本番の寒い間は虻川を中心として鷹狩を行い、ようやく二月の後半になって仙北に渡野した。そして仙北には、四月から七月の鷹狩にはあまり向かないとされる暖かい季節にも二度三度と渡野している。最後の三回の帰国時は同様のパターンとなっている。

なぜ夏場に仙北に何度も渡野したのか。これは横手に佐竹家の預かりの身となっていた本多正純・正勝父子との関係で理解することができ。正純たちがすでに寛永元年に佐竹家の預かりとなっていたことは前節で見たが、そのように配流の処分となっても正純に対する幕府の怒りは解けなかった。

寛永三年四月三十日、江戸において島田利正が幕府の上使として義宣を訪れた。用件は、秀忠が本多正純をいよいよ憎んでいるので、警備を厳しくするようにとの旨である。義宣は閏四月一日付の書状で、番屋をさらに整備し、厳しく監視するように国許の梅津憲忠に指示するとともに、正純に対してもこれまでより警備を厳しくすることを通達した。さらに同十一日付の書状⁽⁸⁾では、警備にあたる侍・小者の数を申告させるとともに、関東からの人や荷物の出入りを一切禁じた。この書状には「御公儀よりも上州番^(本多正純)を致二付而、役儀二万石程御容捨可被成之由」とあって、当時十五万石・二十万石分と考えられていた佐竹家の軍役のうち、二万石分を免除しようというのである。佐竹家としてもそれに見合ったしつかりとした対応が求められた。

そもそも鷹狩には単なる娯楽としての狩猟ではなく、軍事訓練や民情

視察といった意味があり、鷹場となった地域の支配権を確認するものであると考えられていた。⁽¹⁰⁾ 鷹狩シーズンでもない時期に何度も仙北方面に渡野したのは、横手の本多正純に対する警備を怠っていないことを内外に示すためのものだったのではないだろうか。

佐竹義宣は土井利勝を取次とする前は本多正純を頼っており、また義宣が追われた常陸の請取は、正純の父・正信が執行し、次弟岩城貞隆が大坂の陣で戦功を立て、信州更科一万石に取り立てられたのも正信の取り成しによるものであった。義宣としても本多家に対するよしみを忘れず、横手に寓居する正純に対しても八朔・歳暮の音信を欠かさなかった⁽¹¹⁾が、それだけに正純の警備に関してはしっかりとした態度を内外に示す必要があったのである。

このように寛永三年以降の佐竹義宣の鷹狩の変化を本多正純の失脚およびその後の処分と関連させて考えると、寛永元年において見られた鷹狩の変化も、同年に正純が佐竹家に預けられて横手に閉居となったことと何らかの関係があるのかもしれない。正純の横手移住は義宣の帰国に合わせて実施されたが、正純横手閉居後に初めて義宣が正純を横手に訪ねた際には、久保田から横手まで鷹狩をしながらの移動となった。これも一種の軍事行動としてのアピールだったのではないだろうか。

佐竹義宣が領内で熱心に行った鷹狩には、本人の趣味としての側面や、將軍との心性上の紐帯としての側面があるのは当然であるが、幕府との関係で佐竹家が置かれた現実的な立場も作用していたと考えられる。

〔註〕

(1) 及川「佐竹義宣と鷹」及川・加藤・金子編『佐竹義宣書状集―梅津憲忠宛』東京大学史料編纂所研究成果報告二〇一三・三、二〇一三年。

(2) 前掲注(1) 参照。

(3) 根崎光男『將軍の鷹狩り』同成社、一九九九年。

(4) 『大日本史料』第十二編元和八年八月二十一日条・同十月一日条。

(5) 『大日本史料』第十二編元和八年十月五日条。

(6) 高木昭作『日本近世国家史の研究』岩波書店一九九〇、第七章「出頭人本多正純の改易」。

(7) 「天英公御書写」八三号（佐竹義宣書状集―梅津憲忠宛）。

(8) 「天英公御書写」八五号（佐竹義宣書状集―梅津憲忠宛）。

(9) 前掲注(1)。

(10) 「当代記」では、家康は鷹狩の意義として娯楽のほかに健康増進・軍事訓練・民情視察を挙げたとされる。

(11) 渡辺景一『梅津政景日記』読本』無明舎、一九九二年。

「梅津政景日記」に見る佐竹義宣の鷹狩

【表①】元和3年の帰国

元和3年正月11日帰国賜暇、同15日江戸発足、2月2日久保田着
 梅津政景、2月20日～3月5日院内出張、3月29日～4月3日荒川出張

元和3年	鷹狩	鉄砲	その他	
正月15日				江戸発、道中鷹狩
2月2日				久保田着
2月15日～19日	男鹿・虻川			
～3月6日	虻川			
4月14日				江戸参勤、久保田発足

【表②】元和4～5年の帰国

元和4年閏3月19日帰国賜暇、同23日江戸発足、4月上旬久保田着
 梅津政景、4月9日まで院内出張

元和4年	鷹狩	鉄砲	その他	
閏3月23日				江戸発
4月上旬				久保田着
5月6日			雄物川	
5月9日・11日		添川		
5月15日～18日	虻川			
5月20日		添川		

5月24日				手形		
5月26日					雄物川	
6月2日					雄物川	
6月9日					雄物川	
6月11日～13日	岩見					
6月21日～23日		手形				
6月25日					小野	雲雀野
6月29日					雄物川	
7月4日・5日・8日		手形				
7月27日					長岡	初菱喰狩
7月30日						
8月16日						
8月17日						
8月28日						
9月3日	●					
9月6日～15日	虻川					8日～10日、虻川 小屋作
10月1日	●					1日～28日、政景 比内出張
11月3日	●					5日～22日、政景 院内出張
12月1日					●	追鳥
12月3日	土崎湊					
12月6日					●	山追

日数	3月	3月2日		2月6日～15日	2月5日	2月4日	2月1日	正月25日～29日	正月22日	正月20日	正月18日	正月4日～15日	元和5年	12月22日	12月20日	12月16日	12月8日
56日	萱橋	白坂		虻川			鶉木	虻川	●			下刈・虻川		●	●	●	●
19日					●	●			●	●	●						
10日																	
	6日、義宣江戸着		22日、義宣秀忠上洛供奉のため江戸参府、久保田発足									初野					

9月11日	9月10日	9月6日	9月4日	9月3日	8月28日	8月26日	8月25日	8月21日・23日	8月18日	8月13日・14日	8月5日～10日	7月20日		4月24日	4月16日	4月13日	4月4日	元和6年	
	●	●									仙北			●					鷹狩
			●	●	長岡潟	●	笹岡潟	築場		手形					添川				鉄砲
が川	もちは							築場				●							その他
							初菱喰				川狩	5月8日～7月10日、政景京都出張				久保田着	江戸発		備考

【表③】元和6～7年の帰国
4月2日帰国賜暇、同4日江戸発足、同14日久保田着

閏12月11日	閏12月7日	閏12月2日	閏12月1日	12月30日	12月27日	12月21日	12月20日	12月4日～15日	12月3日			11月7日～17日	11月6日	10月21日～27日	10月16日	10月7日～14日	9月28日	9月12日	
●	太平	●	添川	梨平	添川	●	●	仙北／豊島・刈和野他	虻川			虻川／虻川↓飯塚↓龍毛山・和田山↓飯塚↓岩瀬山↓虻川	●	仙北／境	●	虻川			
												(8日) 虻川						●	
																	虻川		
										賜 宣母伊達氏)に下 の雁を慶寿院(義 東金に鷹狩、所獲 1日～12日、秀忠 と飯塚の間で鉄砲 逗留、8日は虻川 雌鷹野 12日～17日は虻川									

10月14日	10月12日	10月10日	【表④】元和7年の鷹狩賜暇 寸白治療の暇、島田利正・土井利勝の取り成し、「御ち儀之様子」 菅橋に塩原の湯を取り寄せる 秀忠の教寄に招かれる	日数	2月10日	2月5日	正月20日～2月3日	正月18日	正月16日	正月13日	正月4日～10日	元和7年	閏12月29日	閏12月26日	閏12月21日～25日	閏12月18日	閏12月16日	閏12月12日	
				90日	●	●	虻川	●	●	●	虻川他 男鹿／土崎湊・		●	●	虻川	●	●	●	
				15日				●	●	●									
				4日								初野							
																			府、久保田発足 12日、義宣江戸参

12月6日	土井利勝に所獲の雁を贈る
12月5日	江戸城登城、所獲の雁を献上、秀忠所獲の鶴を拝領
12月3日	秀忠江戸帰城
12月1日	酒井忠世・酒井忠利・青山忠俊に所獲の雁を贈る
11月28日	島田利正・島田重次・堀田一継・米津田政・猪子内匠に書獲の雁を贈る
11月25日	日野輝資・赤見惣右衛門・津軽信牧に所獲の雁を贈る
11月22日	秀忠越谷へ鷹狩
11月21日	秀忠に若太鷹二つ献上
11月20日	江戸城登城、鳥屋太鷹二つ拝領、江戸発足
11月6日	江戸城登城、鷹狩の賜暇への謝礼
11月4日	江戸に向けて発足
11月2日	今大路親清、一旦江戸にもどり賜暇の礼を助言
10月28日	秀忠に若太鷹八つ献上、二つ拝領、鷹狩の暇を給される
10月24日・26日	島田利正の鷹狩賜暇幹旋の内存、島田利正に幹旋の依頼をする
10月20日	萱橋より島田重次に鷹狩所獲の雁を贈る、重次立腹、「兼而之御りち儀無二罷成候」
10月15日	萱橋へ向けて江戸発足

日数	12月28日	12月26日	12月25日	12月23日	12月11日	12月9日	11月20日～12月5日	11月18日	11月16日	11月13日	11月12日	11月6日	10月29日～11月4日	10月25日	10月11日	10月8日	元和8年			
32日	●	●	●	大平	大平	●	虻川	大平	大平	添川	●	添川	虻川					鷹狩	鉄砲	その他
							15日						6日	久保田着	栗橋着	江戸発				備考
					下莉のため															

【表⑤】元和8～9年の帰国（9年は「梅津政景日記」欠）
10月6日帰国賜暇、同8日江戸発、同25日久保田着

【表⑥】寛永元々2年の帰国

4月15日帰国賜暇、同16日登城拝謝、同18日江戸発足、同30日久保田着

寛永元年	鷹狩	鉄砲	その他	備考
4月18日				江戸発
4月25日～30日	新庄↓金山↓岩崎↓浅舞↓六郷↓横沢↓大曲↓境			帰国途上、30日久保田着
5月4日	荒屋・豊巻			
5月10日～16日	能代↓鹿渡↓能代↓向能代↓朴瀬↓鶴木↓虻川			能代方面、16日久保田帰城
5月24日		添川		
7月3日	北野			
7月5日～13日	仙北↓刈和野・神宮寺↓六郷↓浅舞↓六郷↓横沢↓六郷			仙北方面、8日横手にて本多正純と面会、13日久保田帰城
7月21日	北野			
9月23日	梨平			7月26日～9月15日、政景江戸出張
9月25日～29日	虻川	虻川		鉄砲所獲の白鳥を將軍に献上
9月30日～10月5日	鶴木↓虻川			5日久保田帰城

10月8日	●			
10月9日	●			
10月11日～26日	虻川↓虻川↓鰯柳↓和田山↓上	三倉平		15日～23日寸白を病む、虻川逗留、26日久保田帰城
11月1日・2日	大平			
11月7日～18日	大平・寒川			
11月22日～12月7日	北 仙北↓豊島↓仙北	福川		仙北方面、18日久保田帰城
	男鹿・虻川↓舟越↓鶴木↓虻川			男鹿・虻川方面、24日、福川にて鉄砲、28日、秀忠より所獲の真鶴拝領、12月7日久保田帰城
	森↓野石↓鶴木			
	廻↓脇本↓脇本城			
	本↓虻川↓黒川			
	川↓下刈↓上黒川↓浦山↓堀内			
	大平			
12月11日	仙北			
12月13日	豊巻			舟遊び
12月14日	北 仙北↓豊島↓仙北			仙北方面、22日久保田帰城
12月20日～22日				

11月10日	萱橋					鷹狩	鉄砲	その他	備考
11月6日	石下								10日まで逗留
11月5日	琴寄								
11月3日	栗橋								
10月30日									江戸発
寛永3年									

【表⑦】寛永3～4年の帰国
 10月27日帰国賜暇、同28日江戸登城拝謝、鷹五つ献上、同30日江戸発足
 11月26日久保田着

日数	102日	10日	1日	
12月24日	八田・宝川			
12月25日	添川			
12月28日	大平			
寛永2年				初野
正月4日～9日	添川・男鹿			
正月13日	新城			
正月14日	梨平			
正月18日	土崎湊	土崎湊		
正月20日		穀町		21日、江戸参府、 久保田発足

2月7日～17日	代 虻川・男鹿・能								17日久保田帰城
2月6日	●								
2月4日	●								
正月27日～2月3日	虻川	●	虻川						3日久保田帰城
正月25日			土崎湊						
正月23日・25日	土崎湊		土崎湊						25日、鉄砲のみ
正月22日	湘		湘						
正月20日	寒川・宝川								
正月17日	大平								
正月4日～12日	川 川山↓脇本↓虻 川山↓脇本↓舟 木↓金川山↓舟 内山↓岩瀬山↓ 山↓高岡山↓堀 下刈↓虻川↓浦 岡山↓鳩崎山↓ 崎湊↓穀町↓長 虻川・男鹿／土								初野、虻川・男鹿 方面、12日久保田 帰城
寛永4年									
12月27日	●								
12月26日	●								
12月25日	●								
～12月23日	虻川								18日以前から、18 日、政景久保田着
11月26日									久保田着

6月15日	6月14日	6月9日		4月28日～5月12日	4月18日	4月17日		4月7日～16日	3月8日～4月1日	3月7日	3月6日	2月21日～3月5日	2月18日
			郷↓浅舞↓大曲	仙北／刈和野↓ 横沢↓斎内↓長 信田↓横沢↓六			↓刈和野↓豊島	仙北／刈和野↓ 横沢↓大曲↓小 友↓花館↓神宮 寺↓鷹関川向↓ 神宮寺↓橿岡上 平↓大曲↓豊島	能代 能代	●	●	仙北／豊島・刈 和野	●
松原	添川・			刈和野	手形	添川				●		豊島	●
	雄物川	松原											
		鶉飼	日久保田帰城	仙北方面、5月2 日・6日雨天、12 日久保田帰城				仙北方面、16日久 保田帰城	1日久保田帰城			5日久保田帰城	

日数			～9月14日		8月23日	8月21日	8月10日・12日		7月20日	7月12日		6月25日～7月10日
129日			木↓虻川	男鹿・虻川／鶉		●	穀町			北野	↓大曲↓境	仙北／刈和野↓ 六郷↓漆山↓横 沢↓斎内↓神成 ↓栗沢↓横沢↓ 六郷↓浅舞↓梨 木羽場↓浅舞↓ 梨木羽場↓浅舞
19日					穀町							
3日								藤倉				
	府、久保田発足	10月22日、江戸参	10月2日～6日、 虻川湯治	10月2日～6日、 田帰城	男鹿方面、12日以 前より、14日久保 田帰城	8月24日～9月12 日、政景八森出張	穀町鳥場普請	7月30日～8月9 日、政景院内出張	川狩			仙北方面、7月10 日久保田帰城

【表⑧】寛永5～6年の帰国
10月25日帰国賜暇、登城拝謝、同27日江戸発足、11月22日久保田着

寛永6年	鷹狩	鉄砲	その他	備考
10月27日				江戸発
10月29日	高柳			
11月1日	高柳			
11月2日	高柳			
11月3日	高柳・諸川			
11月4日	諸川・石下			
11月5日	石下・水海道			
11月6日	水海道			
11月7日	下妻			
11月8日	石下・萱橋			
11月9日				秀忠・家光に鷹献 上
				10日白沢、寸白、 13日八丁目、秀忠 より鶴拝領
11月22日				久保田着
11月28日	添川			
11月30日	大平			
12月3日	添川			

12月7日～18日	男鹿・虻川／男 鹿方面↓虻川↓ 上虻川↓浦山↓ 高岡山↓和田妹 川↓飯塚↓伊賀 川↓浜井川↓浦 山↓高岡↓下刈 ↓小泉↓鳩崎↓ 長岡↓槻木↓龍 毛↓太窪↓虻川			男鹿・虻川方面、 16日・17日吹雪、 18日久保田帰城
12月20日	大平			
12月21日	添川			
12月24日	大平			
12月27日	梨平			
12月29日	添川			
正月4日～17日	下刈・男鹿・虻 川			初野、男鹿・虻 川方面。 17日久保田 帰城
正月20日	大平			
正月22日	土崎湊	土崎湊		
正月23日	豊島／豊島↓椿 川↓黒沼↓和田 町↓神内↓豊島			26日久保田帰城
正月29日～2月15日	男鹿・虻川／黒 川↓伊賀川↓鰐 柳↓黒川↓虻川 ↓脇本↓虻川↓浦 井川↓黒川↓浦 山↓新関↓虻川			15日久保田帰城

4月16日～27日	3月30日～4月13日	3月27日	3月25日	3月21日	3月17日		閏2月14日～3月14日	閏2月3日～12日	閏2月1日	2月21日～29日	2月20日	2月18日	2月17日
↓大曲↓境 梨木羽場↓浅舞 ↓六郷↓浅舞 野↓大曲↓横沢	能代・比内／鹿 渡↓能代↓比内	豊巻	豊巻		●		仙北／豊島↓境 ↓刈和野↓大曲 ↓六郷↓沼館(↓ 天童)	能代・虻川	●	虻川	●	●	●
							境 豊島・				●	●	●
保田帰城 仙北方面、27日久	能代・比内方面、 13日久保田帰城			家光、義宣母伊達 氏等に雁下賜	病む、14日久保田 帰城		一旦仙北に戻る、 28日、八丁目より 引き返す、3月11 日大曲にて寸白を 病む、14日久保田 帰城	能代・虻川方面		虻川方面			

8月29日	8月27日	8月25日	8月23日	8月21日	8月20日	8月18日	8月17日	8月16日	8月8日	8月5日～6日	8月2日	8月1日	6月25日～7月9日	6月20日	6月13日	6月8日	5月28日	5月11日～18日	5月6日
●	●	●	●	●	●	牛島	●	●	箱岡	虻川			↓境 郷↓漆山↓六郷 羽場↓浅舞↓六 郷↓浅舞↓梨木 和野↓横沢↓六 仙北／岩見↓刈					仙北	
●			●		●						築場	手形		手形		手形	手形		手形
														添川					
										下刈のため				保田帰城 仙北方面、9日久	鵜飼				仙北方面

日数		10月28日	10月25日	10月20日	10月10日～16日	10月7日	10月6日		9月21日～10月2日		9月4日	9月3日	9月1日
172日		大平	添川	大平	虻川／新城・岩城 ↓虻川	添川	大平	川↓井川↓虻川 虻川↓鶴木↓虻川	虻川・男鹿／虻川↓鰐柳↓黒川 ↓浦山↓井川↓		●	●	●
19日					岩城 新城・				虻川		●		
1日													
	19日登城	江戸参府、久保田 発足、17日江戸着			虻川方面、16日久 保田帰城			城	虻川・男鹿方面、 10月2日久保田帰	町巡検	10～17日、仙北馬		

	11月28日	11月17日	11月25日	12月24日	11月23日	11月22日	11月21日	11月20日	11月18日	11月17日	11月16日	11月15日	10月14日	寛永7年		鷹狩	鉄砲	その他	備考
	萱橋	石下・萱橋		下妻近辺	下妻	石下		木曾泉	高柳近辺	高柳近辺	高柳	越谷							江戸発
久保田着																			
政景、12月20日、																			
29日、萱橋発足、																			
久保田着は不明、																			
東金に放鷹の秀忠																			
に道服を進上する																			
贈る																			
島田利正等に雁を																			
贈る																			
母伊達氏、伊達政																			
宗に雁を贈る																			

【表⑨】寛永7～8年の帰国
 11月13日帰国賜暇、登城拝謝、同14日江戸発足、同28日萱橋発、久保田
 着は不明

4月8日	4月3日	4月2日	3月29日	3月27日	3月25日		3月10日～22日	3月9日	2月12日～3月6日	2月2日～9日	2月1日	正月26日～30日	正月25日	正月22日	正月20日		正月4日～18日	寛永8年	12月26日	12月23日
百三段・豊巻	●	●	●	●	●		内 虻川・能代・比	●	仙北／刈和野	又袋 虻川／虻川↓夜	●	虻川	岩城	●	●		虻川・男鹿／岩城↓虻川↓脇本		●	大平
							虻川・能代・比内方面22日久保田婦城		仙北方面、3月6日久保田婦城	虻川方面		虻川方面					初野、虻川・男鹿方面、18日久保田婦城			

7月30日		7月20日～26日	7月11日～12日	7月8日	7月5日	7月3日	6月30日	6月21日	6月4日	6月2日	5月30日	5月27日	5月26日	5月22日	5月21日	5月18日	5月3日～13日		4月20日～5月1日	4月17日
	和野	仙北／刈和野↓ 六郷↓横沢↓刈	男鹿／舟越														仙北		能代・虻川／鹿渡・能代・虻川	●
手形				手形	手形	手形	手形	手形	手形		手形		手形	手形		手形				
								添川		添川		牛島				牛島				
		保田婦城	仙北方面、26日久	男鹿方面、12日久保田婦城				鵜飼		鵜飼		狼狩			野馬放牧		保田婦城	仙北方面、13日久	能代・虻川方面、5月1日久保田婦城	

9月26日	9月23日	9月20日～22日	9月17日	9月15日	9月14日	9月13日	9月10日						8月9日		8月3日
●	●	虻川	●	●	●	●	●						朝舞		
					●		●								手形
								9月9日、久保田 帰城	28日、萱橋発足	22日、萱橋着	応を命ずる 匠の久保田での饗	14日、徳川義直・ 前田利常・松平忠 昌・京極忠高の鷹	13日再度久保田発 足	湯沢より戻る 天童に待機、9日	6日秀忠病気見舞 いのために江戸参 府、久保田発足、 9日

日数		閏10月8日～20日	閏10月7日	閏10月6日・7日	10月21日	10月6日～14日	9月29日	9月28日
146日		木↓虻川 又袋↓虻川↓鶴	太平	太平	虻川	能代・虻川／虻 川↓能代↓虻川	●	●
14日								
4日								
	10日江戸着 久保田発足、11月	24日、江戸出府、 保田帰城	虻川方面、 20日久			能代方面、 14日久 保田帰城		